

## 離島における地域づくり実践の課題と可能性

—五島列島での調査分析から見る「島外からくる支援者」へのまなざしや困難と地域実践の展望—

○ 立命館大学大学院 日本学術振興会特別研究員 岡部 茜 (8265)

山本 耕平 (立命館大学・1221)

キーワード：地域づくり、離島、若者支援

### 1. 研究目的

本研究は、ファイザープログラムの助成を受ける「市民参加・協同による若者が緩やかに回復する場の創造を目指す実践研究事業」として実施されているものである。その目的は、参加機会が限定されている地域における、ひきこもり等のいきづらさを持つ若者やその家族の生活と現行の支援を明らかにし、今後、島での生活を豊かにする為に必要な仕組みづくりを検討することにある。

本研究が研究対象とする長崎県五島列島では、従来島内での結婚が多かった。しかし現在、若者は18歳で高校を卒業すると島外に就職の為に、専門学校や大学卒業後、島に帰ってくる若者はほんの一部である。思春期に不登校となり、その後ひきこもりとなった若者達は、島内外での社会参加の機会を失うことがある。不登校やひきこもり等の状況と出会った若者達が社会参加を可能としていける仕組みづくり、地域づくりが求められている。

これまで、五島の若者・家族・民生委員の語りを中心に、若者や家族が地域との関わりで感じる困難を分析してきた。そのなかで、離島ゆえの密接な結び付きから生じる両価性、他者からのまなざしに縛られる息苦しさが、島外からやってきた支援者は独特な課題や可能性に出会うと考えた。今後、資源が限定されるなかで、地域のつながりを活用し、ゆるやかな参加を保障する地域ネットワークが若者だけでなく、支援者の息苦しさを克服していくためにも必要であると考えた。

こうしたなかで本研究では、五島列島における地域住民や支援者への聞き取り調査から、地域住民の島外の人間へのまなざしや、島民の島外から来る支援者たちに対するまなざしを分析し、その双方間で生じる葛藤を分析することを通し、今後の地域づくり実践の展開可能性を明らかにする。

### 2. 研究の視点および方法

これまでも量的調査等によって五島特有の支援者意識などの分析を行ってきたが、本研究では、島での生活を若者や家族、島外からの支援者等がどう生きているのか、その生活のなかで生じる葛藤はいかなるものなのかを明らかにするために、フィールドワークやそのなかでのインタビューで得られたデータの分析を行う質的研究の手法をとる。

本研究は、2013年3月5日から3月15日までの10日間にわたる長崎県五島列島（下五

島に5日間、上五島に5日間)でのフィールドワークと、そのなかで行った聞き取りで得られたデータを基に分析、検討を進めた。聞き取り調査では、上五島・下五島合わせて若者、家族、教員、支援者等計74名に協力を得た。聞き取りのデータは協力者の許可のもとICレコーダーで録音したものを逐語録し、それをもとに分析をおこなっている。また、本研究は当事者参加型リサーチであり、データの分析に関しても、実際に五島や長崎県で生活するひきこもり経験を持つ若者や支援者、親たちと共に共同で進めている。

### 3. 倫理的配慮

インタビュー時には、そのインタビューを開始する前に調査協力者に、研究内容について文書・口頭にて説明したうえで、研究者とインタビュー協力者の双方に一部ずつ用意した「研究倫理遵守に関する契約書(調査承諾書)」に記入してもらった。

### 4. 研究結果

分析結果から、以下のことが指摘できる。①綿々と続く地域の歴史で築きあげられた文化と生活に支援者として入りこむ困難さがある、②地域住民の関係性が密接であり、互助的発想が根強く、過度の介入が生じやすい、③島外出身の支援者は過度の島民の結びつきから課題への介入の困難さを感じていることがある、④住民のなかには転勤族の支援者に対する不安が存在する、⑤若者支援において協同が必要と考えられる高校教師には島民からの過度の期待があり、その影響が元旦からの授業や、20時までの補習授業として具現化している。

### 5. 考察

本研究で明らかになった島外の支援者と島民との間にみられる葛藤は、島民が核となった地域ネットワークを形成し、実践を展開するなかで克服できうると考える。なかでも、島民が共通してもつ職がないという悩みを克服する為には、起業を目指す地域ネットワークが必要である。本研究では五島で生きづらさに向き合う若者を中心として、NPO等の既存の資源を利用しエコツーリングを島民と福祉支援者が起業し、そこで若者が働くしかけをつくる。このしかけ創りの為には、当面、ゆるやかな地域ネットワークが必要である。そこで、島民を中心とする環境NPOと研究グループ、社会福祉協議会が中心となった「地域生活支援やさしさの島ネットワーク」を結成し、本年度より若者を主とする地域課題に取り組みつつ、島の若者と島外の不登校・ひきこもりの若者が交流するプログラムを展開する。そのなかで、さらに島民と島民以外の支援者間に生じる葛藤を分析し、実践の方向性を検討する必要がある。